

地域版

日常的な健康相談に対応

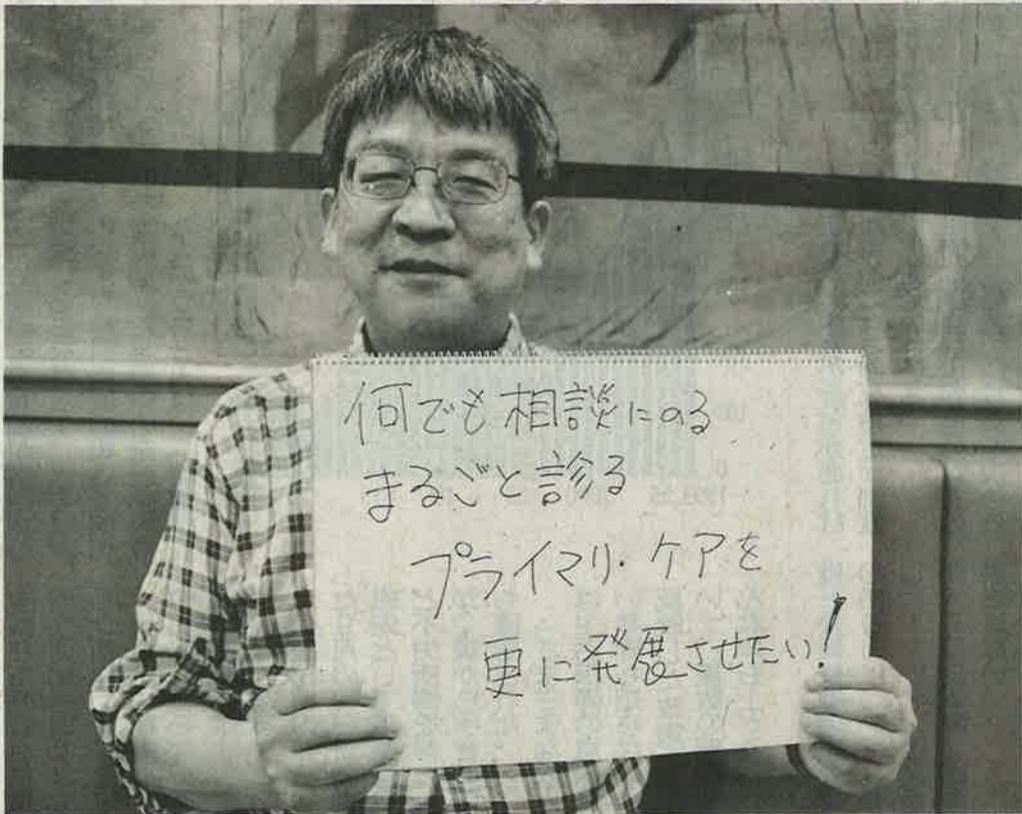
「体のたるさが続く」「带状疱疹のワクチンを打つか悩んでいる」「母親の物忘れが心配」。こんな日常的な健康相談に乗り、患者を多角的に診るプライマリ・ケア(初期診療)の重要性が指摘されている。関西医科大学香里病院長医師で、一般社団法人「日本プライマリ・ケア連合学会」理事の石丸裕康さん(56)に話を聞いた。

【まとめ・塩路佳子】

聞いて！

「プライマリ・ケア」といふべき診療です。患者の生活や家族の背景を把握しながら、地域の中で継続的に診ることが重要です。つまり、「かかりつけ医」が担っている機能ということができます。

一般社団法人 日本プライマリ・ケア連合学会



プライマリ・ケアの重要性を語る石丸裕康医師—大阪府寝屋川市で

◆ほぼ同義と言えるでしょう。かかりつけ医の機能は、5月に成立した改正医療法で「身近な地域における日常的な診療、疾病の予防のための措置、その他の医療の提供を行う」と定義され、単に「かかったことのある医者」というわけではありません。身近にいる開業医が自主的に研さんを積み、かかりつけ医の役割を果たしていることは多く、へき地医療でも見られます。

◆日本専門医機構では「総合診療医」の養成が図られ、さらに当会では広くプライマリ・ケアについてトレーニングされた医師を「家庭医療専門医」として認定しています。

—なぜ、プライマリ・ケアが重要なのですか。

◆医師は内科、外科、小児科と専門化され、内科でも循環器内科、消化器内科と臓器別に分かれています。高齢化によって一人が複数の病気を抱えるケースが増える中、細分化された医療では弊害もあります。例えば心臓と腎臓に病気があり、腰も痛く、風邪気味……といった人は、複数の科をまたいで受診しなければいけません。それぞれが処方されると、ポリファーマシー(多剤服用による有害事象)が起きることもあります。患者を総合的に診て、本人の考えや生活背景を治療に生かせば、優先度を検討することもできます。

—患者は一人一人に寄り添った親身な医療を期待しています。

◆腹痛で大学病院を受診した場合、消化器内科の専門医は、がんなどの生死に関わる病気を早く見つけ、高度な医療を提供してくれます。しかし、検査で異常がなければ別の科に回され、腹痛の症状は続いているのに一向に診断がつかないこともあります。腹痛は必ずしも「病気が原因」ではなく、ストレスなどが影響することがあります。患者の不安を受け止めながら、継続的に診るアプローチも必要です。

—新型コロナウィルス禍では、かかりつけ医の重要性が認識されました。

◆熱が出ても相談先に困ったり、ワクチンを打つことに悩んだりした人もいたでしょう。健康問題のうち大半は、「熱が出た」「眠れない」「たばこをやめたい」など生死に関わる問題ではないとされています。体調に何らかの異常がある人が850人ほどいたら、そのうち大学病院に入院する人は0.3人というデータもあり、身近にいるかかりつけ医の役割は大きいといえます。

◇一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会◇



5月にあった学術大会の様子
—日本プライマリ・ケア連合学会提供

2010年に総合診療などに関する三つの学会が合併して発足。医師を中心に薬剤師や看護師ら全国に1万人以上の会員がいる。プライマリ・ケアの普及に取り組みしており、学術集会やセミナーなども開催している。ホームページ(<https://www.primarycare-japan.com/>)。

困ったり、ワクチンを打つことに悩んだりした人もいたでしょう。健康問題のうち大半は、「熱が出た」「眠れない」「たばこをやめたい」など生死に関わる問題ではないとされています。体調に何らかの異常がある人が850人ほどいたら、そのうち大学病院に入院する人は0.3人というデータもあり、身近にいるかかりつけ医の役割は大きいといえます。

—かかりつけ医などプライマリ・ケアに関わる医師はどう見つけられるのですか。

◆当会のホームページでも専門医の紹介をしています。自分から相性のいい医師を見つけていくことも必要だと思いませんか。風邪で病院にかかった時、他の健康相談をしても幅広く対応してくれるか、口コミなども参考になるでしょう。「通える範囲」で医療を提供してくれることはポイントの一つです。

—プライマリ・ケアを巡る今後の課題は。

◆専門医は全国に十分な人数がいるとはいえず、医学部を卒業後に総合診療医になる人も内科や外科などに比べて少ないのが現状です。専門医の育成やキャリアの支援、かかりつけ医として活動している医師の能力を上げて、全体を底上げする必要があります。より質の高いプライマリ・ケアを提供するには、地域の医療や介護、福祉機関が連携していくことも求められます。